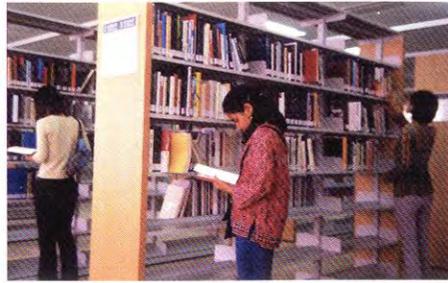


# キャンパス散策 (立命館アジア太平洋大学)



授業風景



図書館で学習する学生

APUでは、日本語と英語の二言語で授業を開講しています。これにより、学生は低回生時には自らが受講できる言語で学び、その間に日本人学生であれば英語、国際学生の多くが日本語を学び、卒業時には日英どちらの言語でも大学教育を受けられるレベルでの語学力を獲得することを目指しています。またこのことにより、日本語の能力がゼロであっても英語の能力で入学できることとなり、優秀な国際学生の確保につながっています。

授業の仕組みとして、2か月で授業が完結するクォーター制をとっています。出席率も非常に高く、各授業で日常的にレポート、プレゼンテーション、ディベートなどを課すため、授業以外に国際学生で1日平均約3時間、国内学生で約2時間勉強するというデータが出ています。また実践力の養成を重視しているため、インターンシップやフィールドワークを正課に置き、多くの学生が履修しています。



キャンパスの学生

授業風景にもAPUの特徴があります。国際学生は、質問があれば先生が話している最中でも手を上げて聞きます。国際学生の自らの主張をはっきりと発言する姿は、日本人学生にも大きな影響を与えています。また直接的に文化交流が行われる授業に、茶道の授業があります。この授業はタイ人の先生により英語で行われます。多国籍の学生がひざを並べて日本の文化を学んでいます。



学園祭風景

様々な国・地域から学生が集うキャンパスは、よく「小さな地球」と言われます。キャンパスでは、授業の合間や放課後に、同国人とは母国語で、他の国の学生が混じってくると英語で、日本人学生のグループと会うと日本語で話を続ける、といった風景がよく見られます。

各国の留学生は、それぞれの国・地域の文化を直接APUに持ち込みます。多くの学生がキャンパスで互いの文化を理解しあい、尊重しあいながらともに学んでいます。特に学園祭の時には、各国の料理の店が並び、ステージでは様々な民族舞踊や音楽、それから日本の伝統芸能などを、国際学生、国内学生が入り混じって演じる風景が展開され、地元市民も多く訪れます。



茶道の授業風景



キャンパス空撮

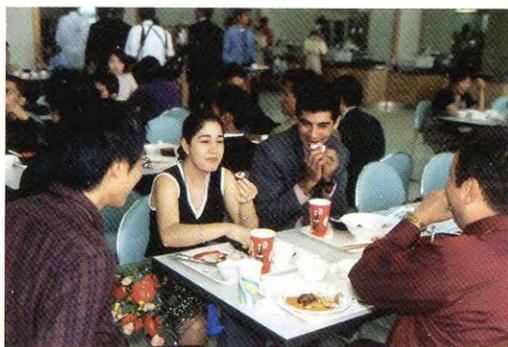
立命館アジア太平洋大学 (APU) は、2000年4月に開学しました。APUは、「自由・平和・ヒューマニズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」を基本理念に、アジア太平洋地域の発展と共生を担う国際的人材の育成、アジア太平洋学の構築などを基本課題として歩んできました。この理念、課題の実現を目指すために、APUではその発足時から、留学生が学生の半数を占める本格的な国際大学の実現を目指してきました。開学以来4年を経過した現在、APUでは、74か国・地域からの国際学生約1800名と、約2300名の国内学生が学ぶという、他に例を見ない多文化環境を実現することができました。

学部は国際社会学を学ぶアジア太平洋学部と、国際経営学を学ぶアジア太平洋マネジメント学部の2学部からなっています。学部教育の大きな特徴として、日本語と英語の2言語で授業科目を開講しています。この「日英二言語教育システム」が、実績を評価され、2003年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム (特色GP)」に採択されました。また、2004年度には、このユニークな多文化環境を活かした英語コミュニケーション能力の向上プログラムについて、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代GP) —仕事で英語が使える日本人育成」についても採択をされています。

2003年度には大学院が開設しました。大学院には、アジア太平洋研究科と、経営管理研究科 (MBA) の2つの研究科があり、全ての授業が英語で行われています。

キャンパスは、大分県別府市にあり、別府湾を望む高台に位置します。約42ヘクタールの校地に、教室棟や体育館、研究棟、メディアセンターなどが配置されています。特徴的なのは、校地内に主に国際学生のための寮 (APハウス) が併設されていることです。APハウスは2棟で900人の収容力があり、ここで国際学生 (留学生) と国内学生が共同生活を送る中で、日常的な異文化交流が行われています。

立命館アジア太平洋大学のホームページ <http://www.apu.ac.jp/>



学食

世界各国から集う学生のために、APUの学生食堂では様々な工夫がされています。例えばベジタリアン用のメニューは色を変える、各メニューに使われている肉（牛肉、豚肉、鶏肉、魚）について絵で表示する、イスラム教の学生のための料理（ハラル・フード）を用意するなどがあります。手軽に各国の料理が楽しめるため、一般の方も多く訪れます。



APハウス外観

入学して1年目の留学生は、まだ日本の生活習慣に慣れていないこともあり、全員がAPUハウスで1年間過ごします。また部屋が空いている範囲で国内学生も入寮できるため、APUハウスでは日常的に異文化交流が行われます。その中で学生同士は衝突し、話し合い、本当の意味での異文化理解を習得していくのです。



ロビー風景

APUでは開学4年を経過し、この3月に1期生が社会に巣立ちました。就職を希望した学生の就職率は95%で、特に国際学生については就職を希望した101人が全員内定を得て社会に巣立っていきました。これは、APUでの豊富なキャリア支援の取組と併せて、APUで培った言語能力や他の人とのコミュニケーション能力、異文化理解能力などが社会から評価をいただいたものと考えています。



就職指導の窓口